

差別問題

溝渕明美 鷺ヶ池中学校2年

私たち人間は、生まれながらにして自由で平等の権利を持っています。この権利と自由はだれも優すことができないものです。今回も前号に続き、人権啓発活動の一環として中学生から募集した人権作文二点を紹介します。

私が知っている差別問題に、こういう例があります。ある地方で、部落地区に住んでいる女の人が、部落でない人の所へお嫁に行ったときのことです。もちろん旦那さんも、奥さんが部落の人であることを承知の上でした。

それでも奥さんの両親は反対したのです。なぜかという、部落の者がよそへ嫁いで行くことは難しいということなのです。それでも二人は、本人どうしの問題だからと一緒になったのです。

結婚する前にお姉さん夫婦は一緒になってはいけぬ、あの人は部落出身だからと言ったのです。それでも旦那さんのお母さんは、そんなことを言うなら二人を連れて二人でどこか遠くへ行こうと言ったそうです。

それからすぐ子供が生まれ、そのころから部落のことを常々に旦那さんが言うようになったのです。そのことは、子供が生まれてからずっと続いたのです。

「お前は、部落出身だ。ええだ」とまで言い出したのです。部落の人であることを知りながら、そういうことを言うのです。奥さんはがまんできなくなり、子供を連れて実家へ帰ったのです。そのことで話し合いをするようになったときです。

旦那さんは「テレビを見ていたら『ええだ』のことをやっていたから教えてあげたのだ」と、言ったのです。

そんな言い方であるでしょう。ある所ではこんなこともありま。結婚が決まって結納を交わすことになった二人がいます。

ところが、男の方が部落の人だとわかり、親が娘を嫁にやめと監禁するということがありました。

現在の世の中で、まだこういうことがあるのです。こういった問題がいつまで続くのでしょうか。子供どうしの遊びでもよく言わ

れます。「あの子は部落の子供だから一緒に遊んではいけない」など。こういうことを、親が言うから、子供たちもまねをして言うのでは

ないでしょうか。どうして、部落外の人はいくつかのことを言うのでしょうか。

私たちは今、部落解放の運動をしています。けれど、私たちが運動をして問題がなくなると、部落外の人たちが今と同じ考えを持っていたら、差別問題はいつまでもたつても終わらないのではないのでしょうか。

私も部落出身です。部落に生まれて「はずかしい」「いやだ」と言う人もいます。

けれど、私は部落に生まれてよかったと思います。もし、私

12月4日から『人権週間』

○人権の共存 互いに相手の立場を考えて

豊かな人間関係をつくらう

○部落差別をなくそう

○婦人の地位を高めよう

○障害者の完全参加と平等を実現しよう

○いじめをなくして、明るい友達関係をつくらう

身体障害者

鷺ヶ池中学校1年

岡本佳奈子

私のおじは、身体障害者で車いすに乗っています。小さいころに、小児マヒというおそろしい病にかかったからです。言葉はしゃべれず、歩けず、立てることも出来ず、字を書くことも出来ません。当然、受けるべき義務教育も、全く受けていません。

私たちは、小学五年の時、香北青少年の家へ合宿に行きました。そこには、少し変わった施設がありました。それは、車いすの人も泊まれるように、入り口に段をつけていないことです。二階へ上がる階段は、私たちが使いますが、入り口は坂になっています。私はそれが当然のことだと思いました。そんな施設をもっと多くの場所に増やしてほしいと思います。

たとえば、汽車や電車に、車いすの人が乗れるでしょうか。乗れるわけがありません。入り口から段があるのですから。車いすの人が乗れる乗り物は、タクシーや、数少ない車いすの人が乗れるバスぐらいのものでしょうか。しかし、

そのバスは、ほんのわずかで、こちらにはありません。車いすの人たちにとっては、とてもきゅうくつだと思えます。もっと、車いすの人たちにとって、便利で居心地のよいような施設を作ってほしいです。

国鉄では、障害者手帳を持っていると、乗るときは、安くなるそうです。しかし、向こう側のホームへ行くのに、階段があるので、車いすは通れません。いくらお金が安くなっても、施設がなければ話になりません。

あまり私には分からないけれど、最近では、交通事故による障害者が増えているように思えます。車いすの人たちは、トイレのときどうするのでしょうか。都会では、トイレの施設が、だんだんと増えているようですが、高知はどうでしょうか。好きで障害者になつたわけではないので、もっと気軽に町へ出て行けるようにしてほしいと思います。私たちは、手も足もあり、言葉

もしゃべれます。大きな病気にかからず、ここまで元気であれば、ことに、感謝しなければなりません。でも、そうでない人たちのことも、立場を変えて考えなければならぬと思えます。同じ人間として、だれがいつそういうふうにもともわらない世の中です。

国際障害者年のように、世界中の人々がお互いに協力し合って、寝たきり病人がおふろに入れるように募金をしたりすることが、そ

の年以外にも、運動として、行われたらいいと思う。私たち、健康な者が、何もしなければ、病人たちはどうなるでしょうか。少しでも、協力してあげたいです。

私のおじの世話は、祖母がしています。おじをおふろに入れるときに、運んで行くのは、父や兄がしてくれま。二人がいなるときは、私と母が運びます。私はいつも、ふとんをしいてあげています。祖母がお腰を悪くするからです。おじは、言葉はしゃべれないけれど、楽しく笑います。笑い声を聞いてみると、何だかほっとします。どうして、そんなおじが、小児マヒなんかにかかったのだろうか。とてもかわいそうです。

